

伝助の家族

中牟田 政也

「あんた、ねえ、あんた。」
「梅干しと、南瓜を買って来ておくれよ。」
「そらあ、お前えの仕事だろうがよ。」
「前から言ってるでしょう、痛いって。」
腰に手をあてながら、縁側に出てきた。

「なんだか体もだるいから、代わりに行っておくれよ。」
煙管を灰受けに叩くと、ぼろりと塊が落ちる。
「俺あ、煙草と酒以外のもん、買ったことねえぞ。」
「だから、この袋を直吉さんに渡すだけでいいから。」
「直吉って誰でえ。」
「八百屋の旦那よ。いつも言ってるでしょうに。よくしてくれてるって。」
「んなもん、行かねえから、知るもんかよ。」
小袋を開いて、適当に眺める。
「とにかく、それを渡して、貰ってくれば済むから。」
「ったく。行きやいいんだろ、行きやあ。」
草鞋を履き直す。
「場所は知ってるの。」
「知らねえよ。」
「船倉の横の、乾物屋の向かい。」
「んなとこかい。ほいじゃ。」
裾を払うと、懐に手を突っ込んだ。
「頼んだよ。」

「はまぐりやーい、はまぐり、はまぐりやーい。」
見慣れた笠と天秤が歩いてきた。
「おう、平次。今日も精が出るな。」
「やや、伝の兄貴。これから丸五屋ですかい。」
天秤を下ろすと、右手で猪口を作る。

「いや、使いを頼まれてんだ。」
「兄貴が。」
「きついんだと。家にいるだけなのに、なにが大変なもんか。」
「夜、励み過ぎでは。おきくさん、お綺麗でやすからね。」
「はん、よせやい。それに、そうでもねえ。」
「どうしたんで。」
「なんでもずっと、腰が痛いんだとか。」
顎を搔く。
「だからみつき、いや、よつきはもう、さっぱりよ。」
「へえ。」

団子屋の軒下で、童子が猫とじゃれている。
「でも、そろそろ餓鬼の一人くらい、俺も欲しいよな。」
「へへ、兄貴も人の子でやしたか。」
目を細めながら言う。
「ひとを何だと思ってやがる、てめえはよ。」
「博打と喧嘩は一流の、三途の瀬渡したあ、兄貴のことで。」
「抜かせ、ただの瀬渡しよ。」
「へへ、ご謙遜なさる。」

桶の蛤を掴み、眺める。
「いつもより形が良いな。」
「今の兄貴には必要でありやしょう。いくつか、どうで？」
「それはそうだが。」
童子に飽きた猫が、寄ってくる。
「いや、やめた。もとの使いを忘れちまっちゃあ、かなわん。」
雑に桶に戻すと、猫は逃げて行った。
「わかりやした。いる時は、いつでもお声を。」
「おう。」
「それでは。」
「おう。泥棒猫に気いつけるよ。」
手早く天秤を担ぐと、向こうへ歩いて行った。

「おい。あんたが直吉かい。」
「へい。直吉でありやす。」
「下町の伝助ってもんだ。」
「伝助さんってえと。」
「きくは、俺の女房だ。」
「ああ、おきくさんの。いつもお世話になっておりやす。」
「俺あ知らねえがな。」

「それで、どんな御用で。」
「これを渡すようにってな。」
「っと。中を開けて良いので。」
「おう。」
するり、小袋の紐を解く。
「梅干しと、南瓜。お代も、ありやすね。」
「知らねえが、そうなんだろ。」
右耳が痒い。
「では、これとこれを。あとこれ、お返ししやす。」
「おう。」
「いい色、いい形をしておりやしよう。」
「よく知らねえが、そうなのか。」
「へい。味わい深く、肉厚で食べがいがりやす。」
「そうか。」
「へい。」

「そういやよ、ここには、あれ、ねえのか。」
「あれとは。」
「あれだ、精のつくもんだ。俺もそろそろ、餓鬼が欲しくてな。」
「そういうことでありやすか。」
棚の隅から、粉末の袋を取り出す。
「なら、これを。」
「なんでえ、これ。」
「高麗人参、聞いたことありやせんか。」
「おう。あれだろ、すげえんだろ。」
「へい。」
「でもその分、高えっていうじゃねえか。」
「へい。」
しかし、と続ける。

「これはもともと、あっしのもんではありやせん。」
「てえと。」
腕を組む。
「あっしが餓鬼の頃、親父の棚からくすねてきたものでありやす。」
「もちろん、その時は価値なぞ、知りやせん。ほんの悪戯のつもりでありやした。」
「それが、大騒ぎになったもんで、言い出せず、そしてそのまま、ここに。」
「そういうことかい。」
「だからこれは、あっしの盗みの、罪滅ぼしでありやす。」
「お代はいりやせん。使って下せえ。」
「しかしだな。」
「だったら。」
「おきくさんには、いつもお世話になっておりやす。その恩返しと思ってくだせえ。」
「おきくとのことは、よく知らねえがよ。」
童子が道を駆けてゆく。その先には、風車を持った男の姿があった。
「わかった。」
「お前えの罪、俺が晴らしてやる。」

「おーい。おとつっつあんだぞ、聞こえるかい。」
「いつまでやってるの。」
「いいじゃねえか。」
伸ばした足で煙管を退ける。
「おい、もう固い帯なんて締めるんじゃねえぞ。」
「ぜんぶわかってるわよ、あんたじゃないんだから。」

「しかし、やっぱ高麗ものは違えなあ。十日もたたずに、すぐ出来るたあ。」
「普通とは違うものね。」
「それによ、今朝はこうやって、お地藏さまに拜んできたんだからよ。」
「あんたがかい。」
「おうよ。」
お腹に向けて合掌する。
「こいつあ、俺に似た、いい男に違えねえ。」
「ふふ、どうだかね。」
「なんでえ。」

「こうしちやいらねえ。おい。」
「なんだい。」
「行くぞ。」
「え、どこに。」
「いいから行くってんだよ。」
「ちょっと、ちょっとあんた。」
筆筒から上着を引っぱりだすと、家を飛び出した。

「大将、大将。みてくれよ。」
「伝助さん。どうしたんで。」
「んな他人行儀はやめてくれ。伝でいい。おい、早う。」
「ちょっと、ちょっともう。急かさないとくれよ。」
遅れて着いたあと、上着を整える。
「大将、あんたのおかげだ。」
「おきくさん。」
「直吉さん。何処へ連れてかれるかと思ったら。」
膨らんだお腹を、直吉に見せる。
「このとおり、効いたよ。」
「これはまあ。おめでたいことで。」
一瞬目を丸くしたあと、細めた。
「ったく、何処へってお前え。大将のところに決まってるだろ。」
「大将のおかげだ、ほんに。ありがとう。」

「そんな、頭を上げておくんなせえ。」
直吉が寄ってくる。
「おきくさんのこと、わがことのように嬉しいです。」
「伝助さん、いや伝さん。家族ともども、これからもよろしく願いしやす。」
「そりゃこっこの台詞よ。神様、仏様、直吉様ってもんだ。」
「お腹の子もあわせて、これからもよろしく頼む。」
「おい、お前えもだ。」
「ええ、よろしく願います。」

童子らが、互いに手を振って別れてゆく。
「はいじゃ、俺あ、丸五屋に行ってくっから。」
「これからですかい。」
「おう。」
「この人は、すぐこれ。あっちゃこっちゃ、ほんに、手前勝手。」
「おい、別にいいじゃねえか。」
「諦めましたよ、もう。あんた、ほどほどにね。」
「そら無理ってもんよ。今日は一段と、酒が旨えに決まってる。」
腕まくりをする。
「伝さん。おきくさんのことは任せて、楽しんで来てくだせえ。」
「直吉さんったら。」
「そら、大将もそう言ってるじゃねえか。」
「じゃあ、帰りは遅くなっからな。」
「ごゆっくり。」
「もう。」

干物を焼く匂いがする。
店番が後ろを向いた隙に、猫が一尾、盗んで行った。
「あんたは、ほんに、めでたい人ね。」
「おうとも。俺あ、日の本いちの幸せ者よ。」

二人を背に、丸五屋へ駆け出した。